

課題解決型演習授業を通して見られた学生の変化

— 岡崎中心商店街の活性化をめぐる事例報告 —

龍田 建次、丹羽誠次郎、上田 裕
愛知学泉大学

Changes of the Students Occurred in the Practices of P.B.L. — A Case Study of the Vitalization of City Central Area in OKAZAKI —

Kenji Tatsuda, Seijiro Niwa, Yutaka Ueda

キーワード： フィールドワーク field work、チームティーチング team teaching、
アクティブラーニング active learning

1. はじめに

平成 20 年 12 月の中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」において、学習意欲や目的意識の希薄な学生に、主体的に学ぶ姿勢・態度を持たせる方法として双方向型授業や能動的活動に参加する機会（アクティブラーニング）を設けるなどの改善策が示されている¹⁾。アクティブラーニングとは、教員による一方的な講義形式の授業ではなく、フィールドワークやグループディスカッションなどを通して、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授法の総称とされている。本学においても、その効果は期待でき、今後のカリキュラム構築のキーワードとして欠かせないものと考えている。ただし、実際の教育現場への導入には、教員の経験が必須で、その効果も客観的に検討されなければならない。

ところで、岡崎大学懇話会・岡崎商工会議所が公募した「平成 24 年度 岡崎における産学共同研究」では、助成対象の事業の 1 つとして、岡崎市役所 商工労政課から「中心商店街の活性化」の課題が示されていた。中心商店街は、昔から地域に根付き、人と人とを結び付けてきた。核家族化、少子高齢化が進む現在、商店街には、ますます地域の核としての役割が期待されてい

る。しかし、商店街の現状は非常にきびしい。大店法などの影響により、客足は遠のき、店主の高齢化や後継者不足など、様々な問題が発生し、核としての役割が果たせなくなっている。特に、学生をはじめとする若者の姿はあまり見られず、問題を拡大させる要因の 1 つと考えられる。そこで、著者らは、正課の授業の中で、学生をまちに連れ出し、自由に歩かせるなどのアクティブラーニングを計画し、実施した²⁾。

ここでは、アクティブラーニングの実践例として、演習授業で行ったこととその経過および結果を報告することで、今後の授業の在り方になんらかの形で還元できればと考えている。

「中心商店街の活性化」をテーマとしたフィールドワークやグループディスカッションを報告すると共に、これらの活動の過程で見られた学生の様子、変化、授業の効果などを報告する。

2. 演習授業の概要と目的

愛知学泉大学家政学部の家政学専攻では、3 年次の後期に「生活学演習 A」というゼミ形式の学科目がカリキュラムされている。この科目は家政学専攻の 4 年生の必修科目「卒業研究」のプレゼミに相当する科目で、本専攻の専任教員全員がゼミ形式で学生の指導にあたっている。

男子1名を含む20名の学生が履修登録した。

まずこの演習授業の目的と意義について3つの点に整理して特徴を述べておきたい。

第1に、今回、著者らは3人の共同ゼミという形をとり、各教員の専門性を活かしつつ役割分担することでチームティーチングの授業を行ったこと。

第2に、卒研のプレゼミとして、卒論への動機づけ、論文作成作法を習得しその能力を身につけることを目指すこと。

第3に、課題解決型(PBL)授業として、問題(課題)設定、解決案(仮説)の提唱、その適切性の論証、その解決案の公表(プレゼン)行うこと。この過程においては、可能な限り教員は介入せず学生の自主性に任せ、学生たちのグループでの共同作業を経て練り上げる方法をとった。そして具体的には東康生商店街の活性化をはかる解決策を考えるという課題に対して、現場から問題設定し、解決案を発想し、その案を現場に返すことを目指した。

以上のような3つの目的を達成しようとする際に3つの活動の場があった。1つめはフィールドワークを行う学外の授業である。具体的には回遊行動調査と地域住民へのインタビューと解決案の地域住民へのプレゼンである。もう1つは、問題を設定し解決案を策定していく過程である教室授業である。そして最後は授業外での学生たちの自主的な学習活動である。

3. 演習授業で行ったこと

平成24年度に筆者らが行った「生活学演習A」の授業内容と学生たちの取り組みについて目を追って以下に示す。

(1) 回遊行動調査

最初の授業でこの演習授業が、「岡崎における産学共同研究」に参加しており、授業の目的と課題、さらに地域活性化について考えておくべきテーマについて学生たちに説明をした。

そして、事前に回遊行動調査票と対象地区のB3版の行動軌跡マップを配布し、地区の大まかな概略を説明し、班毎に何をテーマに散策するか事前に話し合っておくように指示をした。配



写真1 回遊行動調査

布した地図は、岡崎市の定めた「中心市街地区域」³⁾のうち、南端が乙川、東西端がそれぞれ岡崎市役所と伊賀川までとなっている。

9月27日に、「まちの魅力と問題点」をテーマとして、各班2～3名の8班で中心市街地の回遊行動調査(ただし1班2名のみ9月29日に同条件で実施)を実施した(写真1)。

岡崎市図書館「りぶら」を起点と終点にして、康生地区を散策する際に、学生たちには4つのことをやってもらった。

回遊行動調査票に、各自の属性と、立ち止まり着目した地点、その場所での着出時刻、そこでの活動内容および関心をもったモノ・コトをすべてと感想を記入させた。

同時に、回遊行動軌跡マップに、移動したルート線を線で地図上に記入し、散策中に関心をもったモノ・コトがあった地点を地図に記入させた。そして関心をもったモノ・コトを可能な限り撮影するように指示した。また、1000円を上限に補助をし、散策中に自分たちが気に入った場所で昼食することも指示をした。

このフィールドワークの段階では、なぜこんなことをする必要があるのか、岡崎や康生地区への関心などについてかなりの差があったことが、調査票と軌跡マップから読み取れる。

8班(A班～H班)の回遊行動の軌跡(図1)を行動軌跡調査票も参照しながら各班の辿ったルートを見てみると、各班それぞれの決めたテーマに従い独自の行動パターンをもっているが、それとは別に8班のフィールドワークに対する

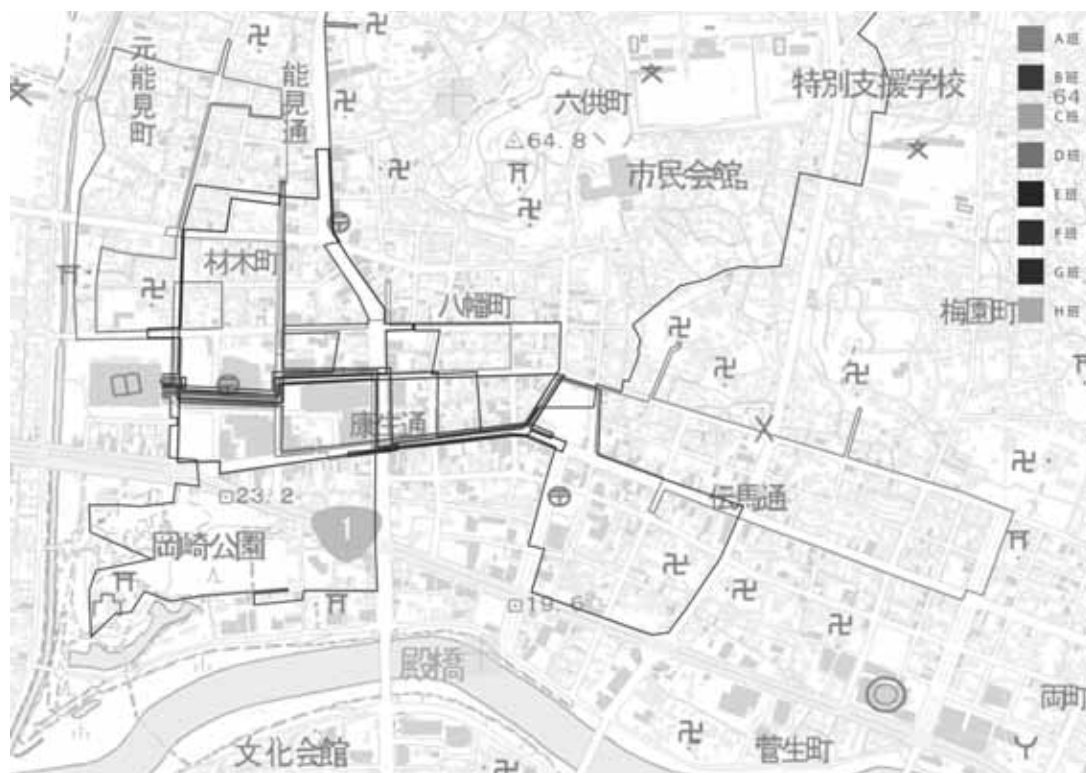


図1 回遊行動の軌跡

関心、意識のあり様に温度差があることに気づく。最も熱心に調査にあたったF班は、調査開始時刻前に自主的に岡崎公園へ出掛けており、その後も、徒に調査範囲を拡げるわけではなく、康生通から伝馬通を中心に丁寧な調査を続けており、調査票にも13箇所の施設・場所に対して詳細な記述を残している。一方、一番動きの少ないH班は、康生西2丁目の和泉屋に立ち寄ったあと、能見通のすこし先にあるかりんとう店まで北上したのみで、与えられた時間の半分となる1時間30分はその途中にあるカレー店での昼食に充てている。これはF班が30分で昼食を済ませ次の地点へ移動しているのと対照的である。

その他に注目すべき点としては、8班中6班が、散策中にまちの人たちとコミュニケーションを取り、それを記録に残していることが挙げられる。「(歩いていると)『頑張ってるね』と気さくに声を掛けてくれる人がいた」、「〇〇さんという方に会い康生町の話を知ってもらった」というように先方から話しかけてくれるケースの

他にも、目標の場所が見つからず「近所の人に教えてもらった」と別の場所で「道案内をしてくださった方と再会した」ケースもあった。さらに、「地域の方がいろいろ話して下さった」、「(お店の人に別の)お店を知らせてもらった」、「優しい従業員の方が色々教えてくれた」という記述がみられる。

(2) 回遊行動調査の報告

調査の翌週、班ごとに回遊行動調査で感じたこと、思ったこと、考えたことを、10個以上出させた。その後、全員の前で、回遊順路と撮影した写真、そして、出された意見を発表させた。次に班に戻って、「どうなったら、まちへ行きたくなるか」をテーマに、発表した内容をそれぞれ絞らせ、まちに対するアイデアとして発表させた。

なお、これらの発表の際、学生には、簡単なワークシートを配布して、他の班の意見に対する「いいね」と「私なら」を常にメモするように指示した。図2に、その記入例を示す。

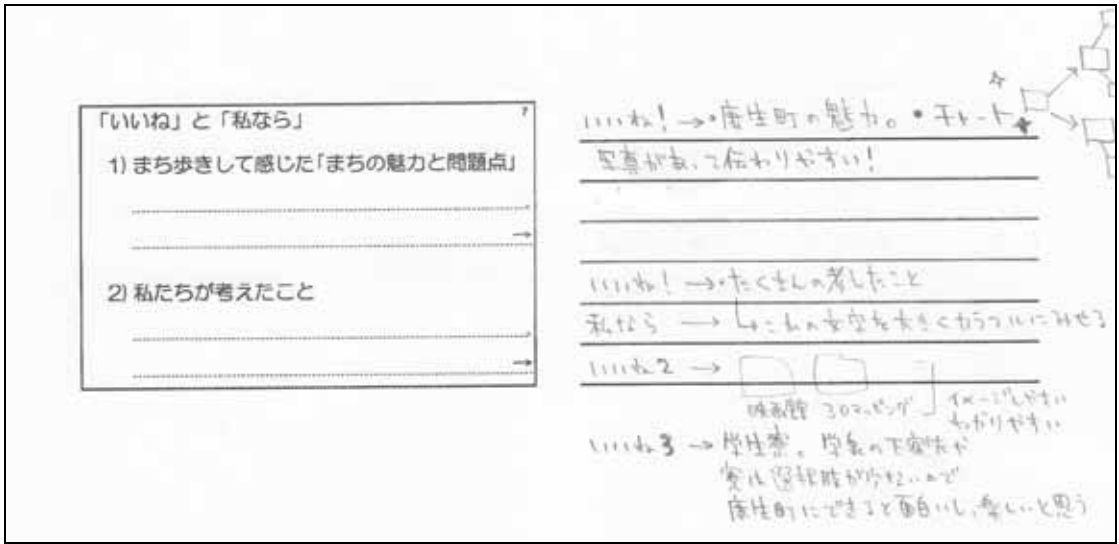


図2 ワークシートの記入例

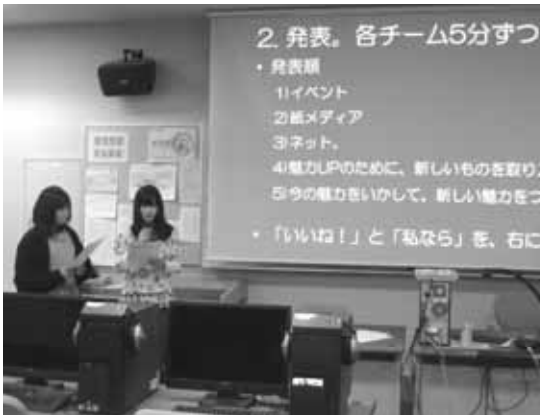


写真2 授業内での発表



写真3 店主へのインタビュー

(3) 活性化のためのアイデアの構築
：教室授業

学生たちが出してきたアイデアは、5つのキーワード、「ネット」、「紙メディア」、「イベント」、「新しいものを取り入れる」、「今の魅力を活かして、新しい魅力を追加する」にまとめられる内容だった。これらの内容に2つの方向性があることから、「まちの魅力UP」と「情報発信」の2つのグループに学生を再編成し、あらためて活性化案を考えさせることにした。

授業内でグループごとに、司会、書記、発表者を決めさせ、話し合わせ、その都度順番に発表させた(写真2)。このときもグループ内での参加の度合い、発言の頻度や、司会、書記、発

表者の役割につく回数などに差がみられた。まだ班としてまとまった案にはなっていなかったが、まちの人たちに意見を聞くことができるものに仕上げさせた。

(4) 東康生商店街の店主インタビュー

学生たちが回遊行動調査で感じたこと、考え・話し合い・まとめたアイデア、これまでに浮かんだまちへの疑問などを、直接、まちの方に聞いてもらうために、学生たちに、再びまちを訪問させた。東康生商店街の店主へのインタビューは各班3～4名の6班で実施した。

6人の店主に、学生からの話を聞き取ってもらい、質問などに答えてもらった(写真3)。そ



写真4 学生による提案発表

a) 「まちの魅力UP」チーム

岡崎の中心市街地には、魅力的な場所が一杯ある。まちを実際に歩いてみて、おいしい隠れカフェやおしゃれな古着屋・雑貨屋さん、イベント、岡崎城など、私たちにとって魅力的な場所を見つけることができた。ただ、お客さんが少ない。スーパーマーケットが少ない。高級百貨店がない。シャッターが閉まっているお店が多い。特に、魅力を知る機会がない。もっとまちの魅力を知ってほしい。

また、「こうだったらまちへ行く」をテーマに、「まちの魅力UPの方策」として、「レジャー施設、シビコを再開発、まちをアートする、大須のような商店街、移動手段を増やす、もっと籠田公園でイベントを開催する、貸出会場をつくる、学生寮をつくる」などを考えた。

一方、まちの人へのインタビューから、まちの人たちが「活気があるまちにしたい」というキーワードを引き出した。

このような過程を経て、まちを活性化させるためには、まちを利用する人を増やすことが必要で、特に若者を増やしたい。「学生寮を作ればいいのではないか」という考えに至った。学生寮に学生が住めば、学生自身がまちの魅力に触れ、古着屋や、カフェの利用する機会が増える。寮に友達を呼べば、その学生もまちの魅力を見つけ、さらに他に発信してくれる。まちの活性化につながるのではないのか。

b) 「情報発信」チーム

まちを実際に歩いてみて、おしゃれな雑貨屋

さんやカフェをたくさん発見することができた。また、閑静でノスタルジックな雰囲気は、まちの魅力と感じられた。ただ、まちを歩いて初めて気が付いたものばかりだった。外へのアピールが下手のように思えた。

まちの web ページやマップもあまり見やすいものではなかった。パッと見、興味をそそられないし、どんなまちなのかイメージしにくい。もっとイラストや写真を使って、POP な感じの「フライヤー」にして店舗などに置けば、歩きながら見られる。

ところで、まちには化け猫伝説がある。まちでも、化け猫をイメージしたキャラクターを作っている。しかし、若者には親しみやすさが足りない。そこで、身近な猫の部分だけを切り取り、かわいいネコキャラを追加してはどうか。もっと猫を連想させるようなモチーフを、商店街に増やしたらどうか。

これらの考えを、まちの人に話してみた。猫をまちのイメージに使うことについては、「イベントの足跡のアートに反応があり、お客さんとの会話につながった」、「猫の形のドーナツを販売したところ、売り上げがよかった」、「やるなら、イメージを徹底した方が良い」など、好意的な意見が多かった。

活性化のための提案として、猫を使った情報発信を考えた。例えば、毎日更新するネコブログ。「まちでこんなネコに会った」、「猫プログラミング」などを開き、まちの情報を発信し続ける。twitter や Facebook のアカウントを作成し、ネコのキャラクターで、お店やお勧めスポットを紹介する。猫を情報発信の軸にすれば、横のつながりが生まれ、情報を共有しやすくなるのではと考えている。

学生たちの発表は、「東康生まちづくりの会」会長の小野修平氏らから好評を得た。また岡崎市出身のジャーナリスト浅井久仁臣氏が自身の twitter で学生たちのプレゼンテーションを評価してくれた。

発表後の学生たちは、「私たちの提案について良い反応をしてくれてとても嬉しかった。」という感想が大多数を占めた。

4. 授業に対する学生たちの感想・意見

「まち歩き」、「案のグループディスカッション」、「まちの商店主へのインタビュー」、「活性化案のプレゼン」という過程を経て、学生たちの意識がどのように変わったかを示すために、半期の授業を終えた学生たちの感想を抜粋してみた。

「見つけた問題点から改善案を導き出して提案するのは難しかった。また、授業の中で何度も他のグループに発表していく中で、自分たちの考えをそのまま相手に伝えることの難しさもわかった。」

「学校を出て、実際に自分たちがまちを歩き、感じたことをまとめる作業は思っていたよりも大変だった。感じた理由や改善点などを見つけることが困難で、グループでの意見もあやふやな状況が続いたことが何より辛かった。それでも、意見交換は大学の授業ではあまり行われないので楽しかった。」

「外部の人に発表するという機会を設けてもらって、自分の自信につながった。」

「今回のプロジェクトは半年間という期間ではあったがとても長く感じ、先の見えないトンネルを走っているような感覚だった。思うようにアイデアも浮かばず、つらい時もあった。しかし、案ずるより生むが易しと、考え込む前にまずスライドを作ってみるなど、ストレスコントロールができるようになった。康生町のプロジェクトを通し、他の人にとったら普通にできることでも、控えめだった自分にとっては『できるようになったこと』が多く、とてもよい経験となった。」

「みんなの意見を聞き、1つの提案にすることに苦労した。途中で意見がぶつかったりもしたが、他人の意見を聞くことにより新たな良案がでることもあり、協力することの大切さを改めて学んだ。」

「グループで動くことはこんなにも難しいと勉強になった。」

「学校内での活動はもっと効率よくやればよいのと思ったことが何回かあったが、自分の力が足りずみているだけになってしまった。そこでもっと頑張ればよかったと思う。しかし、

頑張ったところで自分の話をまじめに聞く人がいないので結局意味はなかったかもしれない。」

「大人数の意見をまとめる難しさを実感した。初めて話す子が多かったから、仲良くなるきっかけにもなった。でも、お互いに意見を言う際に遠慮してしまって、沈黙になることが多く、なかなか前に進まなかった。このようなグループ活動では、誰かがやるからいいという考えではなく、自分がやろうという気持ちでいえないといけないと思った。メールでいつ集まるか連絡したり、声を掛け合ったりという働きかけが重要。仲のいい、いつも一緒にいる人以外の、あまり話したことのない人や初対面の人たちこそ積極的に話しかけてお互いの意見を言い合えるようになれるといいなと思った。」

「大人数で1つのことについて考える大変さが経験できた。普段からグループディスカッションをしているわけではないので、進行の仕方がわからなかったり、沈黙が多かったり、雑談になったりと上手く意見交換ができなかった。でも先生方のアドバイスもあって、みんな徐々に意見を出すことに慣れていき、『これは良いよね』『ここが問題点だね』とみんなで気付けていけるようになった。普段なあなあに過ごしている自分たちにとってとても良いスパイスになった。」

「この演習を通して、1人でなくみんなと考えることが必要だと考えるようになった。どうしたらいいのか、と必死になって考えるだけでなく、人の意見を聞いて、それをもとに自分がどう思ったか、周りはそう思っているかを知ること、さらにできることが増えていくのだなと実感した。」

「みんなが1つになっていろいろな案を出すことができ、本当に楽しかった。自分は、グループで何かやるよりも個人で完成させるほうが好きだと思っていたが、いろんな人と意見を出し合うことで、実際自分も新しいアイデアが浮かび、自分の価値観がどんどん広がっていくのを実感することができた」「このような授業に参加できたことをとても嬉しく思う。」

5. おわりに

以上のことから、この演習授業で評価できる点と課題をまとめておきたい。

学生たちは、「まち歩き」に出る段階では、動機づけは乏しく、やる気もあまりないし、何をどうすればよいのかもわからず時間を過ごす様子が伺えた。しかし徐々に授業へのコミットが強まってくるとき、その「まちの人」との出会い、コミュニケーションが重要な働きをしていたと言える。実際に学生たちの当初の案では、誰もが考えそうなありきたりの活性化案になっていたが、「東康生商店街の店主インタビュー」を契機に、2つのグループの活性化案が具体化しまとまっていった。外の人たちの刺激が、動機づけにおいて重要だと考えられる。教室授業におけるグループワークにおいても同様のことがいえる。課題解決型の授業の意義もこの点にあるとも考えられる。

「まちの活性化案の検討」などにおける「グループワーク」では、グループ内で共通の価値観を見出すのが困難な学生たちにとって、多様な意見をまとめ上げることが難しかったことは授業内の発表とそれに対する感想・意見からも伺えた。しかしこの点においても、現場からの発想、つまり「まちの人」の意見を1つの価値観としたとき、解決できていったようだ。

この演習授業の特色は「チームティーチング」という共同演習の形をとったことだが、これによって各教員がそれぞれの専門を活かしつつ、全体企画、授業運営、外部コンタクトなどをそれぞれ分担することで、演習を動かしていくことを容易にしたと言える。今後も、特に課題解決型の授業では必要であり、有効な方法かと考える。

今後の課題としては、このような課題解決型の授業は、地域との連携とともに持続可能なかたちで進めていくべきであり、そのためにはフィールドとなる地域に、学生、教員、住民が絶えず出入りしている活動の拠点を設けるべきであろう。

もう1つ重要な課題として成績評価の問題がある。全体として成し遂げた課題に対して個々の学生の活動をどのように評価するかという問

題である。社会人基礎力の評価表ように細分化された項目がどの程度達成されたかによって評価する方法もあるが、これが有効かどうかには疑問が残る。カラオケマシンで高得点をとったから、人を魅了する歌を歌えているわけではないのと同じであろう。

全体の活動を部分に還元することなく評価するためには、学生たちがそれぞれの段階で、全体に対して行ったことを各授業において記述させ、それをもとに評価することが有効かもしれない。今回の授業では、回遊行動調査では、まちをどのように歩いたか、そして何を見て何を感じたかを記述させたことは、この方法の1つのやり方であろう。しかし教室授業で、案をまとめていく際に、個々の学生が最終結果である案に対してどのようにかわり貢献したかを知るためには、各授業の終了までに、自分が何をどのような形で参加し貢献できたと考えたかを記述させ、蓄積していくことが必要であろう。具体的にどのようなワークシートを使い、どのように記述させるか、そしてどのように指導するかについてはまだ妙案はない。今後の課題としておきたい。

われわれは今後もこのような形の授業を展開し、機会があればこのような形でその成果を問うてみたい。

本研究の一部は、岡崎大学懇話会の「平成24年度 岡崎における産学共同研究助成金」により実施した。

参考文献

- 1) 文部科学省 中央教育審議会 答申：学士課程教育の構築に向けて、平成20年12月
- 2) 龍田建次、上田裕、丹羽誠次郎：若年層からみる岡崎中心市街地の魅力(学生たちのフィールドワークを手掛かりとして)、地域活性化研究、12、10-19 (2013)
- 3) 岡崎市：岡崎市中心市街地活性化ビジョン(康生・東岡崎周辺地区) (2011)

※図1 「国土地理院地図データ」より丹羽作図
 ※学生たちの感想、意見については明らかな誤字・脱字の修正、文体の統一等、若干の修正をおこなった。